

「COUINAUD 肝臓の外科解剖 Surgical Anatomy of the Liver Revisited」

C. Couinaud 著
名古屋大学教授・第1外科 二村 雄次 訳

京都大学教授・医学研究科消化器外科講座

山 岡 義 生

京都大学第2外科で生体部分肝移植の準備を始めたとき、以前から漠然と知っていたつもり Couinaud の肝臓の解剖を確実にする目的で、このオリジナルを発注したのが本書との最初の出会であった。コピーを教室の仲間に配り、共通の知識にしようとしたのである。そのとき初めてこの本が自費出版であり、発注先が Couinaud 先生のご自宅であることを知った。

本書の原書に接して、その内容の豊富さに驚嘆するとともに、フランス人の思考をそのまま英語に置き換えたことによると考えられる読みにくさいやというほど知らされた。英語のほうに慣れているわれわれにとって、仏語と英語は微妙に異なった使い方がされることも、読みにくさの原因の1つであったろう。この難解な本を、われわれ日本人のため

に翻訳するというとんでもないことを企画され、持ち前の粘り腰で完訳された二村雄次教授に改めて深い敬意を表する。二村一門の“胆管の読み”の確かさには以前からわれわれも啓蒙されてきたが、これも Couinaud をいかに熟読してこられてきたかということで納得できる。

今回の二村訳では、目次からして原著のそれ以上に読者を魅きつける工夫がされているのに気づく。筆者は、自分の必要な部分のみオリジナルを拾い読みしてきたために気づかなかったが、二村訳を読んで Couinaud が自分のデータと文献的データとを巧みに混ぜたうえ、外科医として肝臓をいかに系統的に見ようとしていたかが、改めてよくわかる。二村教授の“著者の思想を日本の読者に伝える”仕事は、見事に成功している。

この本の良さは各章ごとに満載されているので、まず手に取って読んでいただきたい。肝臓の手術を実際にやっておられる人ほど、そのエッセンスが理解できると思う。

最近、日本の各施設で肝臓の手術が積極的に、安全に行われるようになってきた。筆者は、この時機に1度、肝の解剖学的な認識を共通のものとして、拡大手術をも含め標準術式をつくる必要があると考えている。そのような試みに格好の本として、本書を推薦する。そして、今なお現役として研究を続けておられる Couinaud 先生の熱意を吸収して、日本により多くの肝臓外科医が成長することを期待するものである。

●B5 頁200 図163 写真16
原色図11 1996 定価7,828円
(税込) 円400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)